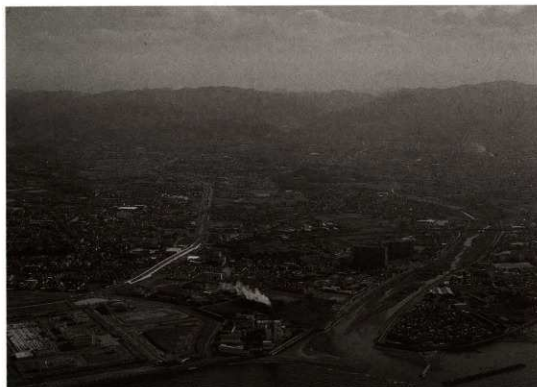


— 府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う —

男里遺跡発掘調査概要・Ⅴ

— 泉南市男里所在 —



男里遺跡全景（北から）

2000. 3

大阪府教育委員会



は し が き

泉南市男里に所在する男里遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡です。遺跡の大きさは、南北約1300m、東西約900mをはかり、泉南市域で最大のものです。

男里遺跡では、これまでの本府教育委員会や泉南市教育委員会等の調査によって、弥生時代の竪穴住居跡や方形周溝墓、平安～鎌倉時代の掘立柱建物跡などの多数の遺構が検出され、製塩土器やマダコ壺、土鎌など、海に近い集落ならではの遺物も多数出土しています。

また、男里と言えば『日本書紀』に登場する「雄水門」、『延喜式』に登場する南海道の「磯野駅」の存在も従来より推定されており、当地が海運・交通の要衝であったことがわかります。

平成8年度より継続して実施してきました双子下池における男里遺跡の発掘調査も5年目を迎え、かつてなかった古墳時代初頭の住居跡や古墳時代後期の土器を検出するなど貴重な成果をあげることができました。これらの遺構・遺物は、本地域の歴史にとどまらず、日本の古代史を解明していく上でも、かけがえのない貴重な資料になるものと確信されます。

最後になりましたが、本調査が、関係諸機関および地元の皆様の多大なるご理解とご協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも、本府文化財保護行政に対して一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成12年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が、大阪府環境農林水産部から依頼を受けて、平成11年度に実施した泉南市男里所在男里遺跡の府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う第5次発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課西口陽一、泉南市教育委員会社会教育課大野路彦を担当者として実施し、平成11年11月に着手し、平成12年3月に終了した。
3. 調査の実施にあたっては、泉南市教育委員会の全面的な協力を得たほか、大阪府泉州農と緑の総合事務所をはじめとする地元関係者の方々から多大な援助を受けた。記して、感謝の意を表したい。
4. 本書の執筆は、第4章第3節を泉南市教育委員会社会教育課石橋広和が、その他については同、城野博文があたった。編集は城野が行なった。
5. 本調査にあたっては、写真・実測図の記録を作成するとともに、カラーズライドを作成した。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構配置図の縮尺は1/80とし、遺構実測図の縮尺は1/40としている。
2. 発掘調査及び、本書記載の基準高はT. P.（東京湾平均海水位）+を使用しているが、本文、遺構実測図ともにT. P. +は省略している。
3. 遺構配置図及び遺構平面図には国土座標VI系に基づく、X・Y座標を表記しており、図面の方位は座標北を示す。
4. 土層の断面は、平面図中に指示線とアルファベットによって示され、その場所が一致する。
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1992年版に準拠した。
6. 図示している遺物の縮尺は1/3としている。ただし第10図はこの限りではない。また遺物実測図と写真図版の遺物番号は統一している。

本文目次

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 調査の方法	3
第3章 男里遺跡をとりまく環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第4章 調査の成果	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	13
第5章 まとめ	15
第1節 弥生時代末から古墳時代初頭にかけての覚書	15
第2節 埴体構築に関して	15
報告書抄録	18

挿図目次

第1図 泉南市及び男里遺跡の位置	1
第2図 調査区位置図	2
第3図 調査区の地区割り	3
第4図 周辺の遺跡分布図	6
第5図 調査区平面図及び断面図	8
第6図 SB01平面図及び断面図	9
第7図 SE01平面図及び断面図	9
第8図 SD01平面図及び断面図	11
第9図 出土遺物	13
第10図 包含層出土の石器	14
第11図 既往の調査成果概略図	16

図 版 目 次

- P L. 1 調査区遠景
- P L. 2 調査区全景①
- P L. 3 調査区全景②
- P L. 4 調査区詳細
- P L. 5 出土遺物

男里遺跡発掘調査概要・V

第1章 調査にいたる経過(第1・2図)

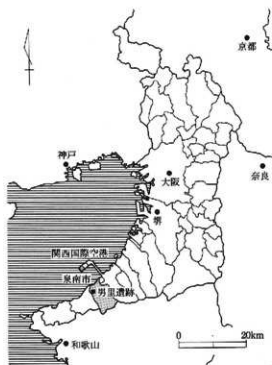
泉南市は大阪府の西端部に位置しており、地形的には北西には大阪湾が開け、南からは和泉山脈が迫り、和泉山脈と大阪湾に挟まれた些少な平野部が人々の主たる活動の場となってきた。また平野部には和泉山脈から派生した多くの丘陵を縫って大阪湾に流れ込む大小の河川が認められる。このうち市域の東端を流れる樫井川を介して泉佐野市や田尻町と接し、西端を流れる男里川を介しては阪南市と接している。また根来街道を通じ和泉山脈を越えると、和歌山県那賀郡岩出町に達する。

このような地形的特徴のもと、市域においては、主に溜め池を中心とする水路網に農業用水の確保を求めてきた。そのため市域には非常に多くの溜め池が構築されることとなる。それらの多くは谷地形を築堤によって堰き止め構築されており、市域の洪積段丘において本格的な耕地開発が開始される中世以降に莫大な労働力を投下して構築されたものである。しかしこれらの溜め池は、築造以来幾たびの修復を経ているとはいえ、歴年の溜水による堤体侵食などが進み、漏水や取水施設の老朽化などが顕著になっており、また防災上の観点からも、これらの早急な改善が求められることとなった。

以上のことに鑑み大阪府環境農林水産部においては府営地域総合オアシス事業を計画し、安全性の確保や効率的な用水の確保などに努めることとなった。ここに報告する泉南市男里に所在する双子池における堤体改修事業もこのような観点より実施されるものである。

双子池は男里地区の農業用水をまかなう主たる溜め池であり、「信長街道」に比定される道を挟んで南北に長く伸びるその姿は、地域に独特の景観を作り上げている。その規模は双子上池が南北約130m、東西約200mを測り、北側の双子下池が南北約170m、東西約150mを測るものである。双子池は地形分類上において男里川旧河道の痕跡とされ、過去の発掘調査においては度々遺跡のメルクマールともいべき多くの成果が得られている。

大阪府教育委員会ではこのような状況の下、95年度より双子下池において発掘調査を実施してきたと



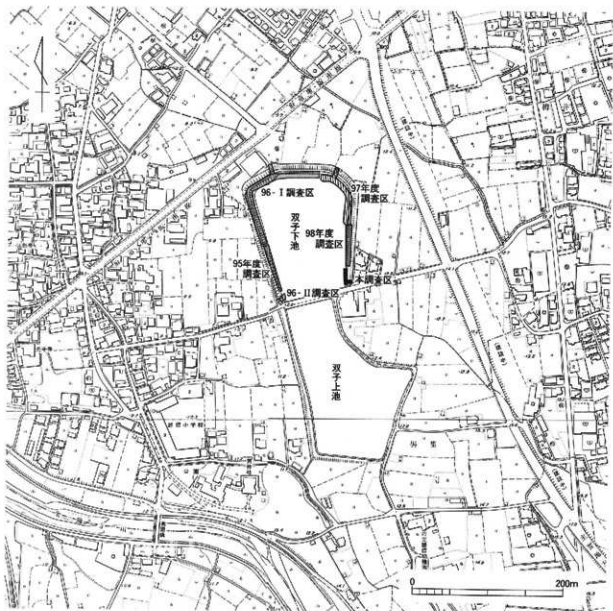
第1図 泉南市及び男里遺跡の位置

ころであり、本書では、今年度実施された第5次調査の成果について報告するものである。

今年度の調査区は、98年度調査区（幅約5.5m、長さ約55m、面積約300㎡）に連続する（下池南西隅部、幅約4m、長さ約25m、面積約100㎡）を調査の対象としている。

調査は文化財保護課調査第1係主査西口陽一が担当し、泉南市教育委員会社会教育課文化財保護係大野路彦氏に現地調査の協力を得た。

なお、調査の実施及び本書の作成にあたっては、伊藤由紀、江尻美代子、片木直幸、蒲生徹幸、藏田弘幸、島津真理、富 愛、福井元気、藤野 涉、真鍋紀美子、向林智与諸君らの援助を得た。また、大前輝俊氏、仮屋喜一郎氏をはじめとする泉南市教育委員会社会教育課の諸氏には有益なご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。



第2図 調査区位置図

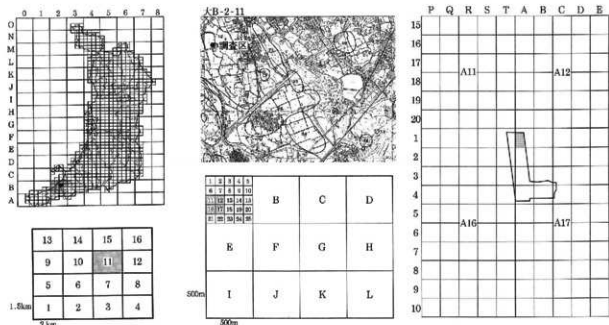
第2章 調査の方法 (第3図)

調査は、95年度に実施した試掘調査の成果および北側に隣接する98年度調査の成果をもとに、バックホウにより堤体の盛土、池底のヘドロを除去し、以下を人力掘削による発掘調査の対象とした。人力掘削による調査対象としたのは調査区の東側において、標高約10.8~11.0m以下についてである。調査区の形状は南東から北西方向に軸をそろえた長辺約18m、短辺約4mの長方形をなす堤体本体の調査区に取水口部の調査区を加えた、平面「L」字形を呈するものである。

調査精度を高めるため、調査区の地区割りをおこなっている。過去4カ年にわたり行われた各調査の地区割りと対応する国土座標VI系に基づく5mの方形区画を使用した。すなわちこの方形区画の設定は、大阪府都市計画図(1/2500)の地形図をもとに、地形図を12等分した500mの方形区画(大区画)をつくり、AからL間での記号を付す。この一区画をさらに25等分し、100mの方形区画(中区画)をつくり、01から25までの番号を付す。この100m区画を400等分したものが5×5mの最小単位の方形区画(小区画)となり、X軸はA~T、Y軸は1~20で示される。今年度調査区についてはA16-1TからA17-4Cにあたり、それぞれを座標値で示せば、A16ラインは $Y = -67.900$ となり、また-1Aラインは $X = -181.760$ の値となる。

このようにして設定した区画は、調査時における遺構実測や遺物出土状況の実測、また包含層掘削の際には、遺物の取り上げの基準となるものである。これらの場合、各地区名は北西隅の枕番号によって代表させることとした。例えば、網掛け部で出土した遺物の地区番号はA17-1Aとなる。なお、東西軸については、1A~1Tの次は2A~2Tとなる。

また、調査の迅速化、省力化をはかるため、航空写真測量による図化作業を実施し、調査区全域について1/20の平面図を作製した。



第3図 調査区の地区割り

第3章 男里遺跡をとりまく環境 (第4図)

第1節 地理的環境

男里遺跡は大阪府の南西端に位置する泉南市の北西端部に位置している。市域は東の榎井川と西の男里川の二河川によって境界をなし、それぞれ泉佐野市や田尻町、阪南市と接している。

地形的に市域を概観すると、基盤山地から北方に向けて扇状に広がる丘陵および高位段丘に挟まれるように低位段丘がよく発達している。両者の縁辺部には中位段丘が帯状に拡がっており、低位段丘との間に比高差約10m程の段丘崖を形成している。丘陵や高位段丘は開発が進み、地形の変形が著しい。また低位段丘については、市域では最も広大な面積を占め、市街化の進んだ市域の中心部を載せる。これらの洪積段丘を挟むように、先の2つの河川がほぼ平行に伸び、大阪湾へと流入している。これらの河川に伴って形成された氾濫原及び谷底低地、自然堤防、また旧河道などの地形が現河道に沿うように分布している。さらに周囲には河川の沖積作用によって形成された沖積段丘が発達しており、人々の居住地や耕地として活用されてきた。

男里遺跡は男里川右岸に立地する市域でも最大の面積を誇る遺跡である。その立地を地形分類的に概観すると、男里川右岸に発達した沖積段丘面のほか、現在の男里川及び旧河道によって形成された自然堤防や氾濫原、また旧河道そのものなどが含まれており、遺跡の面積に比例するように多岐にわたる内容をみせている。遺跡の南端と北端についてその標高を比較すると、南端では約14.0m～16.0m、北端においては約5.0m～8.0mを測り、その比高差は約6～11mある。

これら地形分類のうち旧河道については、今回の調査対象となった双子池がその痕跡であるとされ、双子池を挟んで南北方向に伸びるものと考えられている。

第2節 歴史的環境

男里遺跡は男里川流域に分布する多くの遺跡群の中で最大の面積を占めるばかりでなく、現在までに各所で実施された発掘調査では、その包蔵する歴史的情報が豊穡であり、まさしく地域を代表する遺跡であることが確認されている。それら過去の発掘調査の成果や、そこから再構築される歴史的空間の様相については各々の調査報告書等に詳しいので、ここでは改めてそれらについて述べることはしない。今回の調査は継続して行われる発掘調査の5年次目にあたることから、ここでは95年度～98年度にわたって行われた各調査の概要を中心にみておきたい。

95年度は双子下池の南西部からの調査となった^①。調査面積は約550m²である。調査では弥生時代後期～古墳時代前期と、飛鳥～奈良時代の2時期の自然流路が確認された。流路埋上より出土した多量の土器や木製品などは、自然流路からの出土ではあることを差し引いても、質量共に良好な一括資料としての評価が与えられるものである。また同調査時に双子下池内においてナイフ

形石器が採集されている。詳細は不明であるものの、遺跡の年代を一気に遡らせ得る遺物として注目される。またこの年には今後の発掘調査に備え、データ収集のために堤体によって試掘調査を実施している。

96年度は前年度の調査区に接続する形で、馬蹄形を呈する双子下池の先端部分、北西端部の調査が実施された^②。また、一昨年度調査区に南接する下池南西端部の調査も併せて行っている。調査面積は約1050㎡である。調査では一昨年に引き続き、弥生時代後期～古墳時代前期と飛鳥～奈良時代の大きく2時期に分けることのできる溝やピット群、自然流路などが確認されている。なかでも注目されるのは7世紀中葉から8世紀にかけて構築されたと考えられる「しがらみ」が確認されたことである。「しがらみ」により流水を制御し、計画的な導水が試みられたものと考えられる。この結果周辺には生産域が想定されることとなった。

97年度には、堤体北東端部から南東部にかけての調査が行われた。調査面積は約600㎡である^③。調査では良好な遺構や遺物の検出には恵まれなかったが、調査区の北西部から中央部にかけて比較的安定した地山が確認されたことは大きな成果であった。また調査区の南端部においては縄属時期は不明ながらも大規模な自然流路が確認されている。

続く98年度には下池堤体南東部の調査を実施した^④。弥生時代中期から古墳時代初頭に属する3時期の自然流路が確認された。特に弥生時代中期の自然流路は、明確な遺構ではないものの、当該期に属する遺構としては、遺跡北端での確認となり、遺跡の展開を知るうえで興味深いデータが獲得されたといえる。

以上、みてきたように過去4カ年の調査においては、主に溝や自然流路などが確認され、直接集落などに結びつく成果は得られていない。しかしそれぞれの調査で出土した大量の遺物は、周辺に集落の存在を期待させるに十分なものであり、これらの成果から考えて現在の双子池、すなわち男里川旧河道の周辺に各時代の集落が展開していたであろうことは疑いない。双子池が男里地域の歴史に深く携わってきたことを実証するに、十分な証拠であると考えられるのである。

註 ① 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』(1997)

② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』(1997)

③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅲ』(1998)

④ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』(1999)



1	男里遺跡	17	滑瀬遺跡	33	中小路西遺跡	49	馬川遺跡
2	堂平寺跡	18	穴酒遺跡	34	坊主池遺跡	50	下田北遺跡
3	男里東遺跡	19	穴尾南遺跡	35	岡田遺跡	51	堂空遺跡
4	黒山遺跡	20	市場遺跡	36	岡田西遺跡	52	神野寺(長遠寺)跡
5	山ノ宮遺跡	21	海賀宮北遺跡	37	氏の松遺跡	53	西出遺跡
6	前田池遺跡	22	海会寺跡	38	藤原池遺跡	54	高田西遺跡
7	郷代遺跡	23	海会寺瓦窯	39	本田地遺跡	55	高田南遺跡
8	郷代南遺跡	24	一岡神社遺跡	40	寺塚寺遺跡	56	和泉鳥取遺跡
9	高田山古墳群	25	北野遺跡	41	戎畑遺跡	57	南山遺跡
10	岡中西遺跡	26	大雷代遺跡	42	糠井南遺跡	58	南山遺跡
11	岡中遺跡	27	仏性寺跡	43	上代石塚遺跡	59	自然田遺跡
12	黒ノ池遺跡	28	中小路南遺跡	44	天神の跡遺跡	60	西畑遺跡
13	林島寺跡	29	中小路東遺跡	45	キレット遺跡	61	正方寺跡
14	林島寺瓦麻跡	30	新伝寺遺跡	46	高田遺跡		
15	林島寺銅鑄出土地	31	岡田東遺跡	47	男里北遺跡		
16	堀之池遺跡	32	中小路北遺跡	48	堀島遺跡		

第4図 周辺の遺跡分布図

第4章 調査の成果

第1節 基本層序 (第5・8図)

今年度の調査対象地は双子下池の南東隅部にあたり、現在の堤体軸にほぼ平行に設けられた調査区と、そこから東側に張り出し、現堤体と直交する取水口部の調査区よりなる。よって基本的な層序についても南北方向と東西方向では大きく異なっている。また第2章でも述べたように、調査に先立って重機による現堤体の掘削が行われ、人力掘削による調査対象としたのは南北方向で標高10.8m以下、東西方向については標高11.0m以下についてである。よってここでとりあげる基本層序の観察についても、基本的にはそれ以下の層序について述べるものである。

調査区の北端部から南へ3m附近までは、褐灰色シルトや灰黄褐色砂質土、暗灰黄色砂質土、オリブ褐色砂質土などが、それぞれ約10cmほどの厚みで、北から南へ緩やかな傾斜を持って堆積している。いずれも河川性の堆積と捉えられるものである。さらに南側ではこれらと切り合うように灰褐色砂礫が大きく拡がっている。この砂礫層は双子下池における既往の調査においては、主に双子下池の南東部分において確認されているもので、北側に隣接する昨年度調査区^⑤においては弥生時代中期に属する自然流路のベース面を形成している。

調査区の中央付近ではこの砂礫層を大きく切り込み、後に述べるS D01の埋土であるにぶい黄褐色シルトと、その上に嵩上された堤体盛土である灰黄褐色シルトや黒褐色シルトなどが認められる。これらの堤体盛土からは遺物の出土が全く無く、直接的に各層の形成時期、つまり堤体の構築時期を示すのは困難であると言わざるをえない。

かえて現在の堤体を横断する形で東西方向に設定した調査区では、厚く嵩上された堤体盛土の直下に、中世の包含層である灰黄色シルトやさらに黒褐色シルトが水平に堆積している。黒褐色シルトの直下には地山であるにぶい黄褐色シルトが拡がっている。

このように安定した地山面は、96年度調査区や97年度調査区において双子下池の北東隅部に一定の拡がりを持って確認されている^⑥。今回の成果を考え合わせれば、旧河道の肩を構成するものとして、その方向や規模を示唆するデータとなり得るものである。確認された地山面の標高は10.8m前後を測り、上面では多くの遺構が確認された。

第2節 遺構

今回の調査において確認された遺構はS B01、S E01、S D01、ピット群などである。確認された遺構は、東西方向に設けられた調査区において確認された、にぶい黄褐色シルトの地山上面にて確認されたものである。

以下にそれぞれの遺構について、詳細を述べる。

S B01

(P.L. 2・4、第5・6図)

A17-4 Bの北西部において確認された梁間1間、桁行2間の南北棟の掘立柱建物である。ただしS B01の西側柱列の西側直近にはS D01があり、それによって大きく遺構面が切られているため、さらに西側に建物が伸びていた可能性がある。

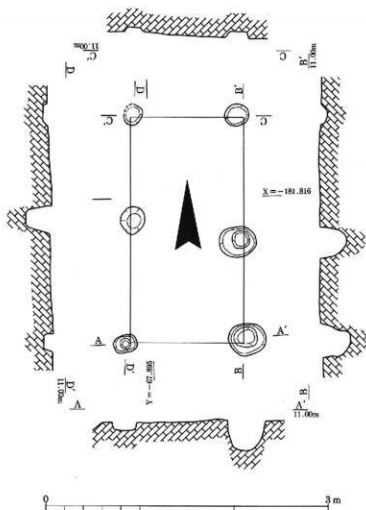
梁間長は1.2m、桁行長は2.4mをピットの心々間において測り、主軸はN-8°-Eに向ける。柱間の距離は概ね1.2m前後を測るが、西側柱筋においては1.1~1.5mを測り、若干のばらつきがある。

建物を構成する各々のピットについては、平面的にはいずれもややいびつな円形または楕円形を呈し、その規模は直径20cm前後、確認面からの深さが10cm前後を測るものと、直径40cm前後、深さ30cm程度を測るものがある。

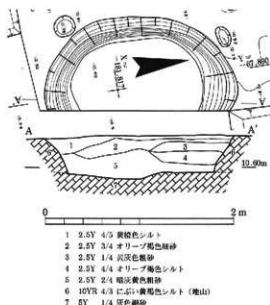
柱痕跡は確認されるものでは直径10~20cmを測る。ピット掘方の埋土は黒褐色シルトであり、柱痕跡の埋土はオリーブ褐色シルトである。東側柱の埋土から高杯(1)が出土している。

SE01 (P.L. 2・4、第5・7図)

A17-4 Bの東端部において確認された井戸であり、内部に何ら構造を有しない、いわゆる素堀の井戸である。東半部が調査区外へと拡がっているため、全形は明らかでないが、南北方向に長軸を向けたややいびつな楕円形を呈するものと推測される。長径約2m、確認面からの深さ約40cmを測る。底部の状況は概ね平坦であり、地山であるシルト層を完全に



第6図 SB01平面図及び断面図



第7図 SE01平面図及び断面図

掘り込み、その下層に広がる灰色細砂に到達している。断面形状は逆台形を呈する。埋土は5層確認されたが、いずれの層からも遺物は出土しなかった。

SD01 (PL. 2・4、第5・8図)

調査区の南端部からA17-3Aから4Aの東端部において確認された溝で、長軸をN-7°-Eに向けて直線的に伸び、調査区外へと進むものである。確認長8.5m、最大幅1.5m、確認面からの深さ1.3~1.6mを測る。底部の標高は9.30m前後であり、底部の状況は概ね平坦である。断面形状は一定しておらず、調査区の南端部では「T」字形を呈しており、両肩から緩やかな傾斜面が段をなして、やがて垂直に掘り込まれているのに対し、確認された溝の中央付近においては、西側のみ段を有し、段から下では、ややいびつな「V」字形を呈している。いずれにしても、非常に堅固に構築された溝であるといえる。

断面観察によると地山であるにぶい黄褐色シルトの上に堆積した黒褐色シルトや灰黄色シルトの上面より切り込まれており、底部に至るまでには層厚約40cmを測るにぶい黄褐色シルトを完全に掘り抜き、シルト層の下に広がる褐灰色砂礫層を大きく切り込んでいる。埋土は大きく2層に分かれ、上層にはにぶい黄褐色シルト、下層には橙色粘質土が堆積している。これらの埋土は非常に堅く締まっており、またその土質も非常に均質なものであることから、流水などによって漸次的に堆積したものとは考えられない。溝の廃棄後に人為的に一気に埋没させられたものか、または元来の目的として溝に充填されたものであると考えられる。埋土からは中世を中心とした多くの遺物が出土した。

SD01の性格であるが、埋土の様相が一様であること、溝の方向が現在の堤体の方向と一致し、一直線に伸びること。また安定したシルト層から、さらに下層の砂礫層に到達するまで掘り込まれていることなどを考え合わせると、堤体構築時に堤からの漏水を防ぐために設けられたいわゆる「鋼土」の溝と考えるのが妥当であろう。またSD01に伴う可能性のあるものとして、溝の東肩部分と併行に、約50cm間隔で並ぶ小穴が確認された。いずれも円形を呈し、直径10cm、深さ10cmを測る。SD01掘削時に設けられた杭などと考えられる。

その他の遺構 (PL. 2・4、第5・8図)

その他、多くのピットが確認されている。いずれもA17-4Aの地山面上で確認されたものであり、ほぼ全域に分布するが、ややA17-4A南東部において集中している。

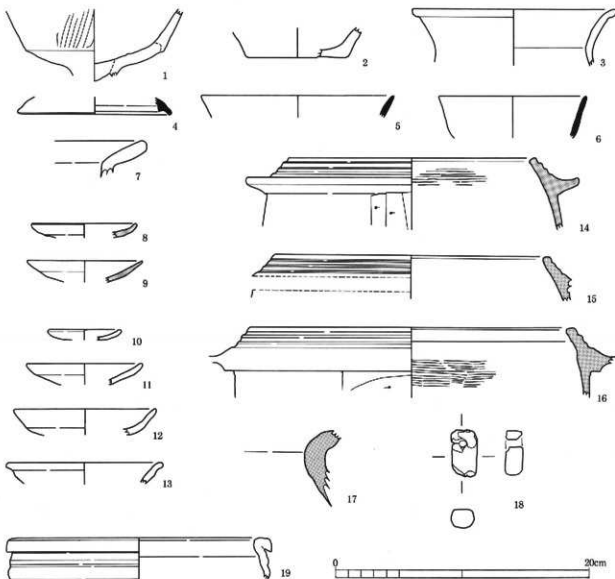
確認されたピット群は平面的にはいずれもいびつな円形または楕円形を呈するもので、直径20cm、確認面からの深さ5~10cm前後を測るものが多いが、中には直径40cm、深さ30cmを測るものもある。また中には柱痕跡が確認されるものもあり、それらは直径10cm前後を測るものが多い。いずれも埋土は、上層の包含層である黒褐色シルトや褐色シルトである。埋土からの遺物の出土がなかったため、明確な帰属時期については不明であるが、埋土の状況から、SB01などと同時期に属する遺構群である可能性が高い。

第3節 遺物 (PL. 5、第9・10図)

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・石器など、幅広い時代にわたって出土しているが、大半の遺物は細片で遺構から出土したのも僅かであった。以下、時代を追って説明したい。

1～3は、弥生土器である。1は、高杯である。杯底より大きく開くが、体部途中で稜を持って屈曲して急激に上方へ伸びる。全体に摩滅しているが、外面の一部では丁寧なヘラミガキが施されるのが確認できる。S B01を構成するピットから出土している。2は、壺の底部である。平底を呈し、底部の器壁はやや薄い。近世の堤の鋼土であるS D01から出土している。3は、壺の口縁部である。頸部から口縁部に向かって外反しながら大きく開き、口縁端部は僅かに肥厚する直口壺と考えられる。堤の下の包含層から出土している。

4～6は、須恵器である。4は、杯蓋である。内面には、比較的しっかりとしたかえりを有し、



第9図 出土遺物

自然釉が認められる。5・6は、杯である。5は「ハ」の字に大きく開くが、6は5に比較してややまっすぐに立ち上がる口縁部である。4・5はS D01、6は包含層から出土している。

7は、土師器の甕である。頸部で「く」の字に強く屈曲して開口縁部で、端部に向かってゆっくりと肥厚する。外面には、粗いハケ目が僅かに認められる。

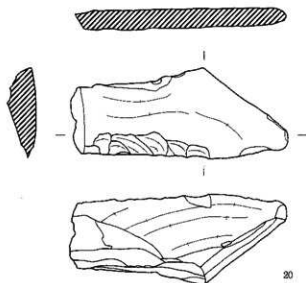
8・9は、瓦器の皿である。8は、端部のみが僅かに丸みを帯びて立ち上がるものである。9は、体部をユビオサエで整形し、口縁部に強いヨコナデを施すものである。いずれもS D01から出土している。

10~13は、土師器の皿である。10は、端部のみが丸みを帯びて立ち上がる最も小型のものである。11は、口縁に向かって稜を持って立ち上がり、底面にユビオサエを施すものである。12は、体部から口縁部に向かって緩やかに立ち上がるものである。13は、胎土が白色を呈する所謂「白土器」と呼ばれるものである。ほとんど砂粒を含まない精良な胎土を持つ。口縁端部には強いヨコナデが施される。10~12はS D01、13は池側の包含層から出土している。

14~16は、瓦質の羽釜である。いずれも在地系の同じ型式のものである。直行する体部を持ち鈔部からは、口縁部に向かって内傾し、端部は上方を平端にしている。外面には3本の凹線を持ち、体部の外面は横方向のヘラケズリ、内面はハケ目が施される。いずれもS D01から出土している。

17は、瓦質の甕である。口縁端部を欠損するが、丸みを帯びて大きく外反する大型の甕であると考えられる。S D01から出土している。

18は、土錘である。丸みを帯びた扁平な長方体の両端部に紐穴を有するタイプで、一方のみが遺存している。S D01から出土している。



19は、陶器の壺である。端部を下方に折り曲げ、平坦にした口縁部を持つ。色調は、赤褐色を呈している。池側の包含層から出土している。

20は、サヌカイト製のスクレイパーである。横長裂片を使用し、腹面末端縁辺部に片面細部調整の刃部を階段状刻離によって施している。腹面右は欠損しているため、全体の規模は不明である。使用のためかなり摩滅している。堤の下の包含層から出土している。

第10図 包含層出土の石器 (1:1)

註 ① 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』(1999)

② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』(1997)・『男里遺跡発掘調査概要・Ⅲ』(1998)

第5章 まとめ(第11図)

第1節 弥生時代末から古墳時代初頭にかけての覚書

前章において今年度の調査において得られた成果の概略をまとめてきた。ここでは得られた成果を中心に、既往のデータ等をも併せて若干の考察を行いたい。

今回の調査によって、95年度より5カ年に及んだ双子下池における一連の発掘調査は完了した。一連の調査によって確認された遺構や遺物を大きく分ければ、①弥生時代中期後半、②弥生時代後期～古墳時代前期、③7世紀後半～8世紀初頭の3つの時期に分けることができる。なかでも、当遺跡においてデータの希薄であった弥生時代後期～古墳時代前期に関する多くの情報が得られたことは特筆に値するだろう。

今年度の調査においては、庄内併行期の遺物を伴う掘立柱建物が確認された。またその周辺にも多くのピットや井戸などが確認されている。前年度までの一連の調査では、当該期の自然流路や溝、多くの遺物が確認されており、双子池周辺、特に池の東側を中心として、当該期の集落の存在が確実視されることとなった。

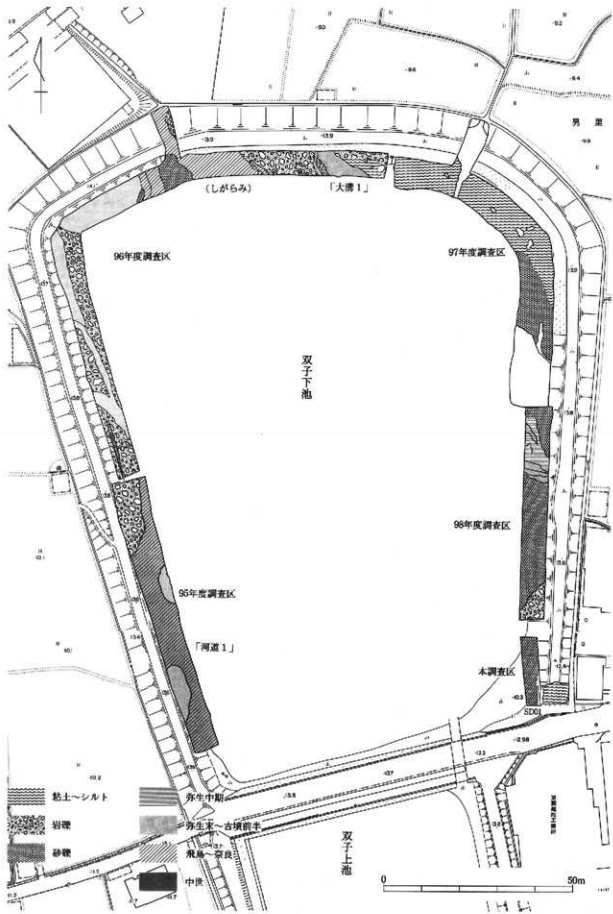
流路は95年度調査の「河道1」を最大のものとし、支流と捉えられる小規模なものを含め、複数の流路が存在していたようである。これら大小の流路によって形成される周辺の微地形は、想像以上に複雑な様相をなしていたことは間違いなく、集落の立地する安定面が、どの程度の拡がりを持っていたかは、今後の調査に依らなければならない。現状では、河道縁辺に存在する限られた微高地上に、比較的小規模な集落が展開していた可能性が高い。

今年度確認されたS B01をはじめとする遺構群は、まさに河道縁辺に展開する遺構群と捉えられるが、同時に96年度の調査によって確認された大溝1などのように、比較的大規模な遺構も存在することから、集落の構造を問うには今後の調査の進展を要する。

第2節 堤体構築に関して

今年度の調査では現在の堤体を横断する調査区が設けられ、堤体築造に伴う「鋼土」の溝(S D01)が確認された。これらのことにより、双子下池における堤体構築及び改修に関する幾つかのデータが得られたので、それらに基づいて堤体構築に関してまとめてみたい。

現在の堤体横断面の観察によると、双子下池においては鋼土の充填以前に、単純な盛土によって構成された堤体が存在していたことが明らかである。確認された堤体の規模は、北側では高さ1.4m、底辺の幅6mを測る三角形を呈しているのに対し、調査区の南端部においては底辺の幅は4mを測るものの、高さは40cm程度しか残存していない。池水の浸食により、形も崩れてしまっている。



第11図 既往の調査成果概略図

盛土は中世の包含層であると考えられる灰黄色シルト層の直上から積まれていることから、堤体構築が中世以前に遡ることはない。ただし灰黄色シルト層からは遺物の出土が無かったため、明確な時期については不明である。96年度調査では13世紀代後半の遺物を伴う包含層が確認されており、双子下池の築造がそれ以降に降ることは疑いなく、築造の年代を知る手掛かりとなる。

これら初期の堤体の構築に関しては先にも述べたように、盛土のみで構成されており、何ら特別な工法は採用されていないようである。盛土自体もそれほど堅く締まったものではなく、また盛土施工に際して、周辺から削平したと考えられる黒褐色シルトのブロックを多量に含むことから、比較的利用しやすい周囲の土砂を利用し、築堤した可能性が高い。

S D01はこれらの初期に築堤された堤体の西斜面を削って掘削されている。地山面から下層の砂礫層に至るまでを大きく掘り込んでいることから、池の漏水を防ぐために、水捌げが良く滲水性の低い砂礫層を除去し、保水に有効なシルトや粘質土に置き換えたものと考えられる。溝に充填された「鋼土」は非常に堅く締まっていることから、丁寧な施工であったことが窺えるものである。同時に、鋼土と同質の土は調査区内では確認されないことから、他所から良質な粘土を選択、運搬し、鋼土として使用しているようである。鋼土には14～15世紀代を中心とした多くの遺物が含まれており、施工の上限を知る手掛かりになる。一方それらの遺物は地域において、一般にみられるものと変わらないことから、鋼土に供した粘土の採掘地は周辺に求められよう。

S D01は現堤体の中央から西よりに位置し、方向的には現在の堤体と一致している。このことから双子下池は、鋼土施工時には現在に近い規模を有していたものと考えられる。今年度の調査区に隣接する98年度調査区の中央付近においても、鋼土と捉えられる青灰色シルト層が確認されていることから明らかである。しかし、池の北東隅から南西隅に位置するその他の調査区においては、同様の鋼土は確認されないことから、池の全周に廻らされたものではなく、漏水した、あるいは漏水の可能性のある地点に集中的に施されたものであるとも考えられる。

鋼土を充填した後に、さらに盛土がなされ堤体の改修が行われている。鋼土直上に積まれた盛土には黒褐色シルトのブロックや砂礫が多量に含まれていることから、初期堤体と同様、溝の掘削、削平によって余剰になった土砂を利用し、盛土としたようである。また調査区の南端においては盛土間に池底の堆積層と捉えることのできるにぶい黄色シルト等が認められることから、堤体の改修時には、整地などは行わずに直接土を積み上げていることがわかる。これら堤体の改修では大きな規模の拡大は行っていないようで、初期の堤体の直上に現在の堤体盛土が積まれている部分もあり、改修が行われたのは不具合が生じた箇所のみ施工された、やはり部分的なものであったと考えられる。

以上、今回得られたデータから、堤体構築に関する所見を述べてきた。堤体改修の過程が、いわゆる「池尻」に位置する調査区南端部においてより顕著に辿ることができるのも、取排水による堤体の浸食が著しく、他の部位よりも堤体補修の頻度が高かったためと考えられるのである。

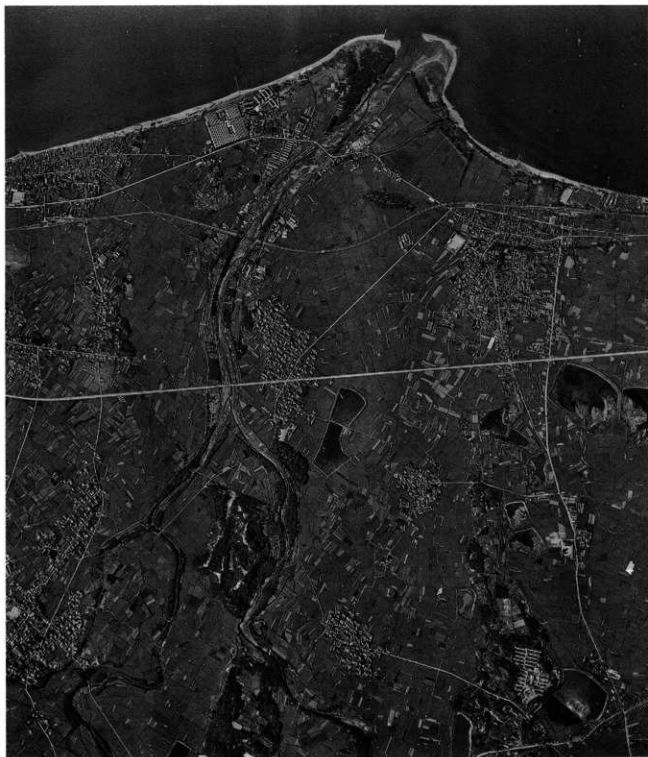
報 告 書 抄 録

ふりがな	おのさといせきはくつちょうさがいよう・V
書名	男里遺跡発掘調査概要・V
副書名	府宮地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	石橋広和、城野博文
発行機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06 (6941) 0351
発行年月日	西暦2000年 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさといせき 男里遺遺	おのさといせき 大阪府泉南市 男里地内	27228	ON	34° 21′ 30″	135° 15′ 40″	1999年11月2日 ～ 2000年1月24日	100	溜池堤体 改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡	集落	<ul style="list-style-type: none"> 弥生時代後期～古墳時代初頭 近世初頭 	掘立柱建物・井戸 堤体構築に伴う鋼土	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 瓦質土器 石器	<ul style="list-style-type: none"> 庄内併行期の掘立柱建物を初めて確認 堤体構築に関する具体的な知見を得ることができた。

版 図

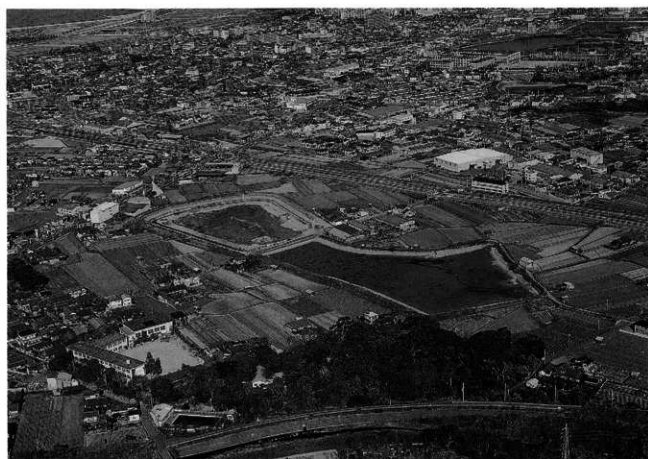


男里遺跡全景（上が北、1947年9月撮影）

PL.1 調査区遠景



(南から)



(南西から)



垂直（上が北）

(北から)



(南から)



(北西から)





東西方向調査区全景（西から）



南壁断面（北東から）



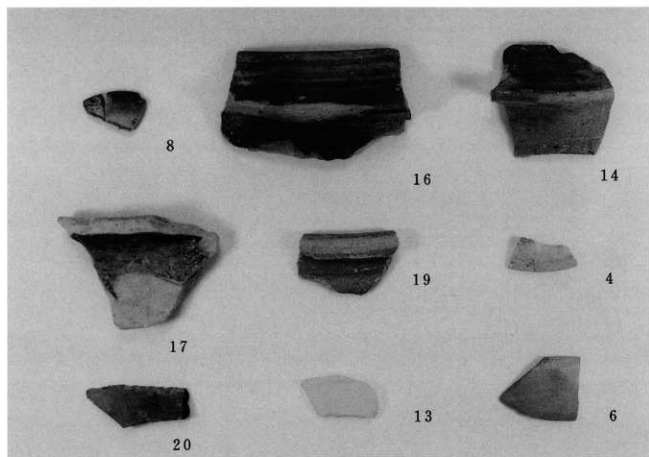
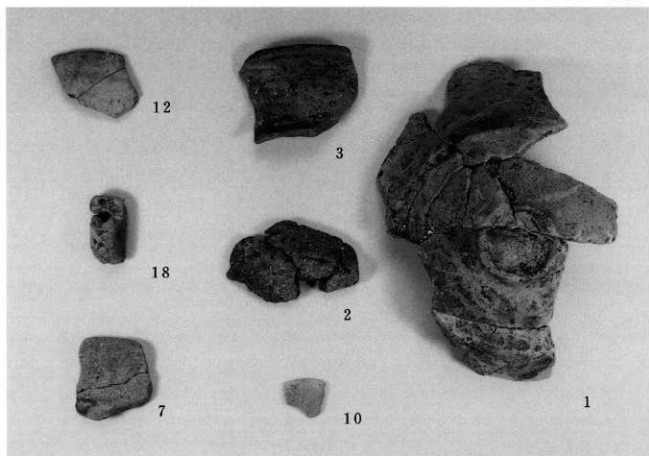
SB01 遺物出土状況



SD01（北から）



堤体部断面（南から）



府営地域総合オアシス整備事業(泉南地区・双子池改修工事)に伴う

男里遺跡発掘調査概要・Ⅴ

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL. 06-6941-0351

発行日 2000年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

